



祖父の、凜とした姿に 憧れていました。

道路に面した鳥居をくぐり、石段を登っていくと本殿が見えてくる。ブナ科の常緑広葉樹スダジイの姿が堂々としている。決して大きな境内ではないが、穏やかに心鎮まる神社だ。

天穂日命（あめのほひのみこと）などを祭神とする、長い歴史のある松崎神社の宮司は若い女性である。神職の衣装がきりりと決まっている渡邊香里さんは、平成二十五年から引き継いだ第十二代目の宮司だ。三人姉妹の末っ子が、皇學館大學に進み神職階位を取得してこの道を選んだいけばんの動機はといえば、「誇り」である。先代の祖父の姿からそれを感じ取っていた。

「いつも背筋を伸ばし、自分を厳しく律して、何があっても凜としているようすは、とてもかっこよかったです」

神社は宗教や信仰をこえて、その地の人びとの暮らしに「安定感」を与える。地域のこころの結び目のような存在でもある。この地を離れた人が、いつ帰ってきててもここにあり、ほつとする。そうした役割を果たすため、もつとつと勉強をしていこうと考えるのだ。

「お祭りが大好きです」

とりわけ神輿にはいつもわくわくする。秋の例祭に、六角形の重厚な神輿を人びとが担ぎ、チョーサイ、チョーサイの掛け声とともに町中を練り歩く。いつ見ても胸が高まる。その興奮は、なによりも地域への愛情の深さの証しなのだ。

松崎神社宮司
渡邊香里



ゆ
う
ゆ
う、
は
り
ま